

Title	依存症の問題を抱える家族の<認識論>の変化についての生命倫理： 医療人類学的研究
Sub Title	
Author	大沼, 麻実(Onuma, Asami)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.72 (2011. ) ,p.155- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成22年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000072-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000072-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- 中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学的研究—ライフヒストリーからみた都市の文化動態—』慶應義塾大学博士論文, 2003
- 廣井栄子「花街に創出された「異空間」—大正期の都をどりにおける「琉球」と「朝鮮」の事例をめぐって」後藤静夫編『近代日本における音楽・芸術の再検討』京都市立芸術大学, 2010
- 深見きみ『はんなり京都—西陣と室町の暮し』河出書房新社, 1988
- 日本オーラル・ヒストリー学会編『日本オーラル・ヒストリー研究』1号～。2006～
- フランク『ライフヒストリー研究入門』ミネルヴァ書房, 1993 (1981)
- 『方法としての聞き書』(思想の科学111) 思想の科学社, 1979
- エマーソン他『方法としてのフィールドノート』新曜社, 1998 (1995)
- シャッツマン, ストラウス『フィールド・リサーチ』慶應義塾大学出版会, 1999
- ラングネス, L. L. フランク, G.『ライフヒストリー研究入門』ミネルヴァ書房, 1993
- レイン・アグロシーノ『人類学フィールドワーク入門』昭和堂, 1994 (1984)
- ヴァン=マーネン『フィールドワークの物語』現代書館, 1999

## 依存症の問題を抱える家族の〈認識論〉の変化についての生命倫理

——医療人類学的研究——

大 沼 麻 実

依存症からの回復において、精神科病院やクリニックでは、依存症者本人に対する治療プログラムに加え家族教室や家族会といった家族向けのプログラムを実施しているところが少なくない。こうした家族向けのプログラムを通して、家族は依存症に対する知識を得て、依存症者に対する見方や言動を見直すことが期待されている。本研究は、そうした家族が依存症に対する〈認識論〉をどのように変化させるのかに焦点を当てる。

この研究課題に対して今年度は、依存症問題への家族の取り組みを分析した平成21年度の研究の継続という位置づけにおいて、依存症者本人の認識の変容を課題とした。回復に向かう依存症者の認識の変容を分析することは、依存症の問題を抱える家族のそれとの比較において重要である。

調査方法としては、アルコール依存症者のためのリハビリテーション施設である「MAC (メリノール・アルコール・センター)」のうちの数カ所〔東京 (立川・南千住・三ノ輪), 京都, 大阪〕を訪問し、プログラムの参与観察と通所者およびスタッフからの聞き取り調査をおこなった。またそのうちの1施設を調査事例とし、2010年5月からの5ヶ月間、月2回×6時間の内外参与観察法による観察を実施した。さらに、主要な自助グループのひとつである「AA (アルコホーリクス・アノニマス)」でのミーティングにも随時参加し、AAメンバーに対してインタビュー調査をおこなった。

AAには代表的なプログラムとして、集団ミーティングと12ステップがある。集団ミーティングとは、依存症者が集まって「言いつばなし聞きっぱなし」というルールのもとに飲酒していた頃の自分や現在の飲酒欲求などについて話すことである。一方の12ステップとは、「アルコールに対して無力であると認めること」など、AAの蓄積された経験に由来する回復のための12項目である。

こうしたAAのプログラムや理念にもとづいているのがMACであり、さらにMACではメンバーが

当施設に通所しながらAAに参加することをプログラムのひとつとしている。なぜならMACは、AAに依存症者をつなげるという役割を自認しているからである。ゆえに、医療機関とAAの〈中間施設〉と呼ばれるMACを調査することは、依存症者が回復していく過程において認識をどのように変容させていくのかを分析することができるのである。

よって依存症者の認識の変容が課題である今年度は、次の2つの側面から問題設定をおこなった。第一に、AAやMACのプログラムが依存症者の認識にどう働きかけるのか。第二に、MACは、理念やプログラムの内容がAAとほぼ同じでありながら、どのように依存症者をAAに結びつけているのか。この2つの問題を依存症者の認識の変容に即して分析した。

調査初期の段階において、AAやMACのプログラムは、単純に回復の手段を提供しているだけでなく、依存症者がプログラムに参加しかつ継続するための機能も果たしていることが明らかとなった。これが第一の問題設定に結びつくのだが、先行研究は飲酒に対する語りの場の重要性や集団での相互扶助的な関係性といった断酒継続を促進する諸要因を明らかにしてきたものの、これらの研究は各プログラムの長を細分化的に分析したものであり、プログラムが一連のシステムとして依存症者の認識にどう働きかけているのかという全体像からのアプローチではなかった。よって本研究は、AAとMACのプログラムに対してシステム論的な分析をおこなうこととし、そのための理論的な枠組みとしてベイトソンのサイバネティクス・システム理論を用いた。

ベイトソンは、本来は通信と制御に関わる領域を分析するための装置であるサイバネティクスの概念を精神に応用し、その視点を用いてAAプログラムとアルコール依存症の世界における認識論について捉えようとした。そして、依存症者を飲酒に駆り立てているのはアルコールへの自己制御を過信するような認識論であり、そうした誤った認識論に至ってしまうのは、ベイトソンが集団分析概念のひとつとして「対称型symmetric」と呼ぶ相互作用パターンが原因だと指摘した。アルコール依存症の場合の対称的パターンは、酒をやめられることを示すために、依存症者が飲酒に挑戦しようとするような競争的な行動パターンを生み出す。つまり、依存症者はこの対称的パターンがエスカレートすることによって酒に溺れてしまうのである。

このようなアルコール依存症のメカニズムに対して、AAは従来の認識論を転換することによって回復に効果的なプログラムを作ること成功したとベイトソンは分析した。つまりAAは、アルコールに対して挑戦するのではなく、「依存症者はアルコールに対して無力である」という認識論にもとづくことで、依存症者を断酒へと導いたのである。

しかし、たとえ認識論の転換がベイトソンの分析したように依存症者の対称的パターンを防ぐとしても、それは理論上のことにすぎない。というのも、依存症者の対称的パターンは、そもそも認識の変容を妨げることにもなりかねないからである。ゆえにAAが断酒という依存症者の目標を実際に達成させているのだとすれば、メンバーの対称的パターンをコントロールするような何らかの機能が、プログラムの実践において働いていると考えられるのではないだろうか。この点を明らかにするため、私はAAプログラムの核となるミーティングと12ステップに対して、サイバネティクスの視点を応用して分析した。

調査・分析の結果、AAでのミーティングは、「言いつばなし聞きつばなし」というルールによって依存症者の対称的パターンを〈制御〉しているという点が明らかとなった。すなわち、批判や意見をしない／されないというこのルールは、たとえ自分が対称型の相互作用パターンを相手との関係に対して

望んでいたとしても、自ら対称型の行動パターンを起こすための理由は与えないからである。

また12ステップは、依存症の回復を目指すための手段ではあるが、ステップに断酒というゴールが位置づけられているわけではない。この特徴により12ステップは、他者と張り合うために用いることができないのであり、したがって対称的な相互作用のパターンを回避するようなシステムを採用しているといえる。さらに12ステップでは、メンバー間での階級づけがなされないことも確認された。ステップの各段階が回復の進行状況を表しているわけではないため、メンバー間の上下関係を回避するようなシステムとなっている。メンバー間の平等性は、対称的パターンだけではなく、ベイトソンが対称的パターンの対概念として提示する「相補型 complementary」の相互作用パターン—支配する側とされる側が相互補完的な関係に陥る—も回避しているといえる。これは、対称的／相補的パターンがエスカレートすることによってその関係性に生じるとされる「分裂生成 schismogenesis」も防止していることになる。つまり、逆に言えばAAという集団を分裂生成に至らせないシステムは、依存症者の認識の変容を支えているといえるのである。

本研究の第二の問題設定は、MACがAAと同様の理念とプログラムにもとづきながらも、なぜMACは依存症者をAAにつなげるという役割を果たせるのかであった。この調査・分析に際して焦点をあてたのは、医療機関を退院しAAにつながるまでの過程にある依存症者である。依存症からの回復を望みながらもAAに結びついていかない依存症者の認識論を、MACとAAの構造特性の違いによって分析した。その結果のひとつとして、たとえば依存症者はAAにおいて「一(いち)依存症者」として存在するが、MACでは「一(いち)個人」として所属し、通所することができるという違いが明らかとなった。つまりMACでは、自分自身を依存症とはまだ認めきれていない依存症者が、AAにつながるまでの「モラトリアム期」を〈仲間〉と過ごしながら回復への道を歩むことができるのである。そうしたAAとの差異が、依存症者をAAにつなげるというMACの役割と関係する意味なのだと考えられる。

今年度は、アルコール依存症者の認識の変容に着目し、依存症の回復に成果を挙げているプログラムをサイバネティックスの視点から分析した。また認識の変容を、集団の構造特性との関係性から明らかにした。本研究は、論文という形で発表し、さらに京都大学で行われた「負の感情」研究会にて一部を研究発表させていただいた。以上を、今年度の研究成果としてご報告させていただきたい。

## 楽器の合理化と〈身体感覚〉をめぐる考察

寺 前 典 子

### 1. はじめに

本稿は、前年度の考察で簡単にふれたフルートを取り上げ、その合理化の過程を人間の五感や律動といった〈身体感覚〉と関連づけて検討する。これを「音楽のコミュニケーションにおける音楽的時間の研究」と題する博士課程研究支援プログラムの最終年度における成果の報告とする。